郷土資料

越谷須賀丁野県市指定文化財他吾山資料
昭和四十六年六月二十七日～麻田十一回

第四十一回史跡めぐり資料

(一) 久伊豆神社及境内旧跡
(二) アリタキアーポレータム
(三) 天嶽寺と越谷吾山関の他

越谷市郷土研究会

第四十一回史跡めぐり案内

一、日時　六月二十七日　日曜
　　集合　越谷駅　午前十時

一、コース

越谷駅……途中有名な西鶴の名ノ木（御殿町会田美佐男氏宅地内）（指定市指定文化財）
↓
天嶽寺……沼津・吾山句碑　御獄場供養碑他
↓
久伊豆神社……社業に服を。資料3参照
↓
アリタキアーポレータム四ノ4ノ5天照記念碑と絵馬図など

一、会費　二〇〇円　昼食代　他

備考　資料は特に重要なものを集めたので御活用下さい

主催　越谷市郷土研究会

備考　市内の文化財しらこばとは同指定　たぶの木越ヶ谷ニ二ヒ二ノ二有形民俗市指定　建長元年板碑　会田美佐男氏宅地内に在り（御殿町三ノ三六）市指定

目次

○越ヶ谷領　（新編武蔵風土記）二頁
1. 天嶽寺　（〃）二頁
2. 御守殿頃他（〃）三頁
○四町野村。迦楼既（〃）三頁
○久伊豆神社境内の文化財
1. 平田篤胤の仮殿屋　県指定　四頁
2. 久伊豆神社の絵馬　県指定　五頁
3. 久伊豆神社の社殿　市指定　六頁
○アリタキアーポレータム内
4. 初りのき　市指定　七頁
5. らくうしょう　市指定　九頁
○久伊豆神社の祭礼と山車（だし）荻原理士(○)
○天嶽寺沼津　住職　横本一成氏述稿　十二頁
6. 越谷吾山の碑文　墓碑銘　木村館長稿
　同資料　教授　解説　注　十四頁
7. 御獄場供養碑一基
8. 其の他　戸張栄五郎墓碑等

越ヶ谷領

越ヶ谷宿ハ日光及ビ奥州街道宿駅の一ニシテ古ハ騎西庄ニ属シ越ヶ谷町ト呼シカ　延享四年ヨリ宿ト唱フ　江戸ヨリ行程六里　古ハ下ニノスル大沢町ハ自ラ一村ナリシカ　其後年代詳ナラス　当宿ニ属シ越ヶ谷町大沢町ノ二ヶ所ヲ合セテ一宿トスト云　次立ノ人馬ハ五十人五十匹ノ定数ヲモテ互ニ十日ヲ限リ　草加粕壁ノ二宿　其餘吉川町及ビ鳶ヶ谷、大門、岩槻ノ宿々ヘモ次立ヲナス　依テ元禄八年四月酒井河内守検地セシ時ヨリ一町一反六畝二十歩ノ地子ヲ免除セラル　宿ノ四隣東ヨリ遷ハ乭曽根村南ハ七左衛門村　坤ハ谷中村　西ハ四丁野村、北ハ花田村、艮ハ小林村ナリ　東西廿町半、南北九町餘　用水ハ須賀川村溜井ヲ引沃ケリ、家数五百四十九　多クハ街道ノ左右ニ連住ス　当所文禄ノ頃ヨリ毎月二七ノ日ヲモテ市ヲナシ時用ノモノヲ交易ス　御打入ノ後ヨリ御料所ニテ今モ然リ　新田ハ享保十七年　宝暦十一年ノ二度ニ検シテ高入トス

高札場　乾ノ方往還ノ内境板橋ノ側ニアリ

小名　本町　中町　新町

元荒川　宿ノ乾往還ニ橋ヲ架スモ水除ノ堤ヲ設ク　大沢町ノ界ヲ流レ川幅三十四間餘　又此川及ビ板橋ト云

田羽堀　倍ノ神ノ方ヲ流ル出羽介正之当所ニ往シ屈曲シテ会田氏ノ屋敷ヲ囲ミ　恵比寿堀ヲ云　相伝フ会田コトハ後谷村旧家富右衛門ノ唱フ

塚　田町ニアリ　ワツカノ塚ニテ嘉吉二年三月シト彫リタル碑アリシカ　近キコロウシナイ云

神明市神社　嘉吉二年ノ歌碑ニテ正徳年中　今ノ橋合ト云ハ地ヘ移セリト云　神主須藤摂津ナリ

八幡社　文和二年ト彫シ　青石ヲ神体トナセリ。

天嶽寺　浄土宗　京都知恩院ノ末　至登山遍照院ト号ス　寺伝ニ云、開山寿阿源照ハ太田道観ノ伯父ナリト　依テ太田下野守当寺ヲ建立セル由ヲノス　サレド源照ハ道観ノ伯父ナルコトハ外ニ徴ナケレバ疑フベシ　其後四世玄澄トイヘル僧住職タリシ時　天正十九

年十一月　東照宮当宿へ成ラセラレ寺領十五石ヲ附セラル　合徳院大猷院殿モ御祈願ノツイテ　当寺ニ来ラセ賜ヒ御前ニテ法問ヲ命セラレ　又上意アリテ江戸ニメサレ登城セシコトアリシトイフ。本尊ハ両孫殿ヲ安置ナセリ

表門　中門　楼上ニ釈迦ヲ安ス

鐘楼　元文元年十一月再鋳ノ鐘ヲカケリ

熊野社　観音堂　地蔵堂二宇　塔頭　霊光院

法久院　通照院　善樹院　松樹院　圓蔵院——

新義真言宗　乞曽根村照蓮院門徒福寿山ト号ス　本尊不動ハ恵心ノ作ニシテ長サ二尺三寸ノ立像ヲ安セリ

天神社　東西院　当山ハ修験江戸青山瘋癇寺ノ配下　医王山ト号ス　本尊薬師の坐像　長サ一尺三寸恵心ノ作ト云フ

稲荷社　澄海寺　羽黒行人派　修験江戸日本橋　苔蒸町稲荷門跡配下　本尊大日ヲ安ス

天神社、　稲荷社

観音堂　観音ノ坐像　一尺一寸八分　伝教大師ノ作ナリ。天猷寺持

御守殿跡

宿の亥ノ方ニアリ　慶長ノ頃ヨリノ御殿ナリシガ　明暦三年江戸ノ回録ニテ御城ノ内モ焼失アリシヨリ、御仮殿ニカノ地ヘ移サセラレ　其跡御林トナリ　当所ノ民小林藤左衛門、浜野藤蔵二人御林守タリシカ　元禄八年検地ノ時責税ノ地トナリ御屋敷ノ跡ノミ御林ヲ存セリ　今ニ御守殿跡又稲荷林トモイヘリ

つづき

新編武蔵風土記稿（七）　自三八七頁　至三八八頁

四町野村

四丁野村ハ江戸ヨリノ行程用水等　前村ニ同シ　家数六十六　東ハ越ケ谷宿、南ハ谷中村　西ハ神明下村　北ハ元荒川ヲ隔テ大房村ナリ　東西四町餘、南北ヘ三町餘　永草トモニ恵ブ　正保ノ頃ハ御料所ナリシガ其後永井伯耆守ニ賜ヒ　宝暦六年　上リテ御料所ニ属シ今モ同シ　検地ハ元禄八年酒井河内守改入。

商礼場　村ノ西ニアリ

小名　押切組　御縄先組　野尻村

元荒川　村ノ北ヲ流ル　川巾四十間余　川添ニ堤ヲ設ク

久伊豆社　天文四年ノ創建ト云　当村及ビ越ケ谷宿大沢町五箇根村神明下村谷中村花田村ヒケ所ノ惣鎮守トス　迎接院ノ持　下同ジ

○神明社　○稲荷社　○浅間社

○愛宕社（弘善寺ノ持）　○稲荷社（村民ノ持）

◎迎接院　新義真言宗　末田村金剛院末　越谷山神宮寺ト号ス　天正十九年寺領五石ノ御朱印ヲ賜フ　当院ハ天文四年智賢栄中興開基スト云フ　本尊ハ弥陀ヲ安ス

○鐘楼　寛永三年ノ鐘ハ破損シテ、安永八年六月再鋳ノ鐘ヲカケリ

○観音堂

○地蔵院　迎接院ノ門徒ナリ　霊瑞山六道寺ト号ス　慶長八年尊栄造立セリ　本尊地蔵ヲ安ス。

○天神社

○弘善寺　同宗　五箇根村照蓮院門徒清竜山観音院ト号ス　文禄三年中興開山尊清再建セリ　本尊千手観音ヲ安ス

○稲荷社　○薬王寺　同門徒瑠璃山東光院ト号ス　文禄二年長立ト云フ僧中興セリ。本尊不動ヲ安ス

○薬師堂　○十王堂　弘善寺ノ持

久伊豆神社境内の文化財

其の一　出典　越谷市の文化財第一集五頁

平田篤胤板寄居　真福寺記念物（旧跡）

所在地　越谷市越ヶ谷一七〇〇

久伊豆神社境内

指定　昭和四八年八月廿七日

平田篤胤のあらまし

平田篤胤は　安永五年（一七七六）秋田、大和田清兵衛の四男として生れ、後に平田藤兵衛の養子江戸詰になる。

篤胤が国学者として一家を成し、真菅乃屋の塾号で開塾したのは文化元年（一八〇四）であった。

その後次第に門人が増え、平田国学が盛況するに及び文化十三年（一八一六）には家号を伊吹舎と改め若も大望から大角と改称した。この頃平田国学の基礎的完成を見たといえよう。

越王流越ヶ谷新町の山崎長右衛門篤利の入門は同じ文化十三年である。翌十四年には小根市右衛門安輝と町山善兵衛正理が入門し、三人で越ヶ谷地方門人グループをつくっている。

篤胤が地方門人獲得に力を注いだのは、平田国学の伝播はもとよりのことであるが、門人より経済的援助を乞うためのものであった。したがって、出版助成という形で世話人を通して寄附金を集めている。

越ヶ谷の豪商山崎篤利は出版費助成の大金を調達出来る門人であったばかりでなく、生活上の物資や食品なども届ける反面、広い倉庫群には平田家の衣類や版木類も預る便宜を与えていた。現在山崎家には三十数通の手紙類があってそれらの事情を知ることができる。

文化十五年（一八一八）に、篤胤は山崎篤利の世話にて越ヶ谷の山一豆腐屋より鋼瀬夫を迎えている。久伊豆神社には文政三年（一八二〇）再工山田貞由による「天岩屋戸開之図」を奉納している。

（注）イ、天岩屋戸開之図――神社に保管す

ロ、板蔵屋、修復し現存す

ハ、篤胤の関係碑も尚って左側に存す。

碑銘者墓

其の二

久伊豆神社の樹

所在地　越ヶ谷市越ヶ谷一七〇〇

久伊豆神社境内

指定　昭和十六年三月廿一日

推定樹齢　二〇〇余年

特徴

幹は地際から七本に分幹し、高さ二・七米の柵に全皮幹が露導されている。林廻り七・二七米、枝張りは東西一四・五米、南北二七・二米　枝葉幾延は、四九五平方米に及んでいる。

花は枝下一・五米に垂れ、谷に五尺藤と呼称された。花色は濃紫色で房状無限花序をなしている花期は毎年五月一日頃から十日頃までが最も見頃で、訪客が殺到する。古来藤は酒精を施すと樹勢

が盛んとなり、花付もよく、花の色も美しくなる
といわれ、第二次大戦の前までは施肥や手入をし
ていたが、戦後それも行届かず、花房も短かくな
った。

フジは、豆科のフジ属（Wisteria）に属する夏
性の落葉樹で、日本・中国、アメリカ、朝鮮に少
しづつ異ったものが自生している。我が国産のフ
ジは大別してツルが右巻のノダフジと左巻のヤマ
フジがある。久伊豆神社の藤は前者の優秀な系統
で、基本種は本州・四国、九州の山地に自生がある。

其の三　市指定記念物（名勝）

久伊豆神社社叢

面積　総面積　四九ヒ五坪（一六四ヒ三㎡）

所在地　越谷市越ヶ谷一番一ヒ〇〇番地

指定　昭和四二年一月十一日

郷社久伊豆神社の参道は、元荒川河畔から入る
が入口から第三鳥居まで実に三七〇米もあり以前
には黒松、赤松混合の並木が鬱蒼として昼尚暗し
の形容もできたが、近年、台風の度毎に何本かづ
つ倒れたり、立枯れしたりして次第に淋しい状態と
なった。その空所に昭和三七年に補植したメタセコ
イヤ（あけぼの杉）百本は大部分すくすくと育ち既
に八米を越す樹高のものもある。

また拝殿の前にはクスノキ（地際幹廻り二・四米）
目通幹廻り四三米が最も大きい。）が四本、本殿の背
後と左右はスギ・ヒノキ、クロマツ（一本）モミノ木
（現在は枯れてなくなった）スダジイ、タブノキ、
モチノキ・ケヤキ、エノキ・ムクノキなどの樹叢を
なし、その下にはアオキ・シロダモ、ヤブツバキ等
の常緑の陰樹とニワトコ・アカメガシワ・クサギな
どの落葉樹と夏性のサネカズラなどが茂り　下草と
してはジャノヒゲ、フユノハナワラビ、メヤブソテ
ツその他の草本が地表を覆っている。

また社務所前の池の周囲にはヒノキ、サザンカ、
ツツジなどに覆われた築山があり、全体として遠方
からもうっ蒼として認められる。

大部分の樹種は昔　植栽されたものと野鳥や風の
運んだ種子から生じたものの内　環境に適応したも
のが残ったものと推定されるが、本市内の社叢とし
ては最大のものと思われる。社叢を形成する　主な

樹種と数量、大きさなどについて概要を述べると

樹種	昭三六・二 二九種	昭四六・三・一四調
黒松	九二本	六七本
赤松	五二本	〇本

何れも相当の大木で黒松の最大のものの目通り幹廻りは昭和三六年十一月二十日調べで二・四八米であった。

右の表でも解るように赤松は十ヶ年の内に五二本が全部枯れたり倒れたりして一本もなくなっている。これは種々の原因が考えられるが倒伏の原因としては、この地域に完全な排水溝がないため大雨や長雨のとき停滞水のため根の直根が呼吸困難で枯れ、僅かに地表近くの側根だけとなり、地上部を支える力が弱ったことによると思われる。

また空気の汚れも松類、特に赤松の枯死の原因として考えられる。

メタセコイヤ（あけぼのすぎ）は現在七本あり（昭和四六年三月調）大きいものでは地際幹廻一・一米、胸廻幹廻〇・五米　樹高八米余に育っている。

(2) 参道を除く　境内の主な木

樹種	目通り幹廻	地際幹廻	本数
スギ	Ⅰ 四・一八m Ⅱ 二・五五m	三・五〇m	大小 十八本
イトヒバ	Ⅰ 二・九五m Ⅱ 三・〇〇m	四・〇四m	一本
ケヤキ	Ⅰ 二・九三m Ⅱ 三・一〇m	五・三〇m	大小 一〇本
カヤ	Ⅰ 二・五六m Ⅱ ―	―	大小 十一本
スダジイ	Ⅰ 二・一四m Ⅱ ―	―	大小 十七本
モミノキ	Ⅰ 一・九五m Ⅱ ―	―	〇本
調査月日	Ⅰ 昭和三六年調 Ⅱ 昭和四六三調		

其の四　市指定記念物（天然記念物）

ゆりのき（モクレン科）

所在地　越谷市越ヶ谷一番

アリタキ、アーボレータム内

指定日　昭和四二年一月十一日

推定樹齢　五〇余年

アリタキ・アーボレータム内の中央部西側に単植されている。昭和二年四月に同園開設直後に十年生の若木を植えたもので、環境が適したためか順調な成長が速く、昭和三十六年十二月八日、市の依頼で本田正次東大名誉教授が来られた時には地上一・五米の幹囲一・七五米・地際幹囲は二・三〇米・樹高二〇米余に育っていた。毎年五月から六月はじめにかけてチューリップ状の花を無数に開く。

昭和四六年二月の測定では地上一・五米の幹囲は一・八〇米、地際幹囲二・八〇米に肥大していた。

ユリノ木はアメリカ中部原産の落葉性大高木で葉は大型で浅く四裂し、伴天を用いたような形なので俗にハンテンボクの名がある。花は直径五～六cmで弁の底に橙色の班紋がある。学名（ラテン語名）は Liriodendron tulipifera L. 英名は Tulip Tree. 和名はユリノ木で Liriodendron はギリシャ語の Lirion（ユリ）と dendron（樹）の合字であるが花はユリよりもチューリップによく似ている。花後プロペラ状の翼のある種子の集合した長さ六cmほどの果実を結び落葉後も樹上に残っている。ユリノキ属は地質時代には相当繁栄したらしく、化石となった種類も十六種、氷河の襲来によって死滅し僅かにアメリカとアジアと一種だけ残っている。アジアのはシナユリノキ（Liriodendron chinense S.A.R.）で漢名は鵝掌楸といいユリノキよりも樹も花もやや小形で、中国の江西・湖北・四川の各省に分布している。ユリノキは生育が速く、葉形、樹型、花などが美しく、病虫害も特別にないので本国のアメリカばかりでなく、ヨーロッパにも早く導入され美しい並木や庭園樹となっている。わが国へも明治時代に渡来し、現在、新宿御苑、国立博物館、東京大学理学部付属植物園などに見上げるような巨木となっている。これら先輩樹に比し、上記のユリノキは樹齢も若いが少なくとも市内最大のものである。

○□○□○　アーボレータム　○□○□○

10. 市指定記念物・天然記念物

らくうしょう（ヌマスギ科）

所在地　越谷市越ヶ谷字一番
　　アリタキ・アーボレータム内
指定日　昭和四二年一月十一日

来歴

昭和二年春、パリーのビルモラン種苗会社から種子を購入播種したものであるが元来はアメリカ南部からメキシコにかけて分布している落葉性針葉樹で、大体北緯四三度が限界である。沼沢地、河岸、湖岸など水湿地を好みそういう場所ではしばしば地表に近い根から垂直に膝状の隆起を生じこれをサイプレスの膝（Cypres knee）とか膝根とよんでいる。上原敬二林学博士によれば、同氏がアメリカで見た最大の膝根はテキサス州テリー郊外の水中にあったもので、水面上一五米あったという。現在までに報ぜられている最大の記録は高さ二・一米　径六〇cmである。膝根は一種の気根と見なされ、相当大水にならないと大きな膝根は現れない。

アリタキアーボレータム

ラクウショウは学名 *Taxodium distichum* RICH. 英名を Baled Cypress 或は Swamp Cypress. 和名をラクウショウ或はヌマスギと呼ばれる。よく育つと樹高二五米～五〇米直径二米～五米にもなりと五〇～一、〇〇〇年の樹齢のものも原産地にはあるという。とに角針葉樹の中で最も水に強いもので欧州の植物園では池の中に大きく育って根際の幹が糖剤状にふくらんだものを各地に見た。

春の新緑は明るい緑色で、羽状に列んだ葉は柔軟で羽毛に似れるような感があり、秋末には緑色に紅葉して風に飛び散る。花は五月に雌花雄花を生じ、雌花は後に卵円形でやや上ノキの実を大きくしたような果実を結び翌年秋に成熟する。

アーボレータム内のラクウショウは小数の膝根が出ているが新潟御苑や井の頭文化園の低湿地にあるものは多数の膝根が生じている。ラクウショウは水湿地を好むが、高知市の高知城の相当高い所にラクウショウの巨本を見たが、これは遠らく上の方から常時適当に水分が潤れてくるのかと思われる。この他平地に在るのは宮崎神社境内である。

久伊豆神社の祭礼と豪華な山車（だし）

市史監修員　秋原龍夫氏談

◎　来歴

新しい年の幸を祈って、越谷のどの神社も初詣に賑うが、就中久伊豆神社の繁栄を物語る豪華な山車が現存しているという話があるので、この機会にかかせていただく。

話はだいぶさかのぼるが、昔江戸の山王祭や神田祭には何十台もの豪華な山車が街々をねった。非常に精巧なものが多く、何万の群集が見とれる中をしずしずと連続行進したのである。

神田祭について

「東都歳事記」天保七年版には例年必ず出る「山車」として

一番の雛　二番の鳳　三番の翁以下約二十を挙げた中に、十六番に「素盞嗚尊ならびに猩々」としているが、この猩々が精巧なからくりであったらしい。

江戸が火災が多いから、この天保以前からのものがそのまま保存されたとは断言できないが、とくに斯く精巧なからくりの猩々の山車が、戦前に越谷の街をねったと考えられるのでよく記憶している人も多いのではないかと思う。

江戸神田の山車がどうして越谷にきたかと云えば、明治期に東京の街が急速に近代化して大きな山車をねり歩かせることが不適当になり、ある時期に横浜の富豪が買いとり、後更に越谷の某家が買い取って、久伊豆神社の祭礼にこれを引き出すことになったということである。

この山車、現在は東京の博物館に保管され、一度ならず博物館やデパートに展示されたと云うことである。

以上　ある有名な服飾史家からうかがったままを紹介するものである。

「ばか祭り」の由来

谷に越ヶ谷の祭を「ばか祭」と言われるが別に意味のある事でなく終戦直後街を挙げての大賑いの祭を感心した某新聞記者が「ばかに盛大なもの」と新聞にのせたことから呼称されるに至ったと云う。

祭礼　九月廿八日～廿九日

主　祭　神……大国主命、言代主命

（俗に云うえびす、大黒様）

武蔵七党の一である野与党の氏神だったのかと云う。

野与党はその昔、騎西、岩槻、大相模、八条地区に勢力をもった一族である。大社として古から村々の崇敬を集め越ヶ谷、百間根、神明下、谷中、四丁野、花田、七左衛門村の総鎮守であった。

江戸時代には、初代徳川家康・二代秀忠将軍の鷹狩りに際し参拝休憩した由緒ある神社である。

祭礼は九月廿八日より以前は三日間にわたって催されたが、交通規制その他で現在は二日間に省略されている。祭礼当日は庁舎使の参向及び各神社宮司の奉仕があって祭典が執行され、このあと御神輿の市内渡御があり、祭礼年番の町内に設けられた御仮殿に奉置される。

この御輿渡御にはその警護の供奉として氏子総代や世話人が花笠にカミシモ袴等の古式装束で、年番町の巫女、若衆と共に百米からの行列をつくる。

御輿を担ぐ者は出発前からのしきたりで四丁目（豊本町）の人々が白丁姿で奉持する。行列は露払いを先頭に神太鼓、神・四神剣、朱雀、青龍、白虎、玄武、御弓、御太刀、伶人、巫女、世話人、神官、神輿等である。

このあとをかねて待期していた各町内それぞれの山車を曳き出し、囃子屋台で神楽を舞う女など、頗る賑やかな祭となる。

この山車の中には、かつて神田明神で使われた「からくり」の精巧な「猩々山車」などがあったが、その山車は上野の博物館に収められ見ることは出来ないが、その他の一つ「竜神山車」は今でも　六町一丁目に保管されている。

備考　この祭の実況をハミリ映写にしてあるから必要なときはごらんください。

天嶽寺の沿革

住職　榎本一成

一、寺号

埼玉県南埼玉郡越谷市越谷駅二五四九番地

西京知恩院末本寺　至登山　知恩院天嶽教寺

二、開基草創

文明十年　太田下野守開基

三、開山歴歴

浄土宗祖十代の法孫　踏禁衣　十道社会善一向

専阿源証大和尚、生国大和国にして太田道灌侯

の伯父也　文明十六年八月十五日の誕生、当寺

に於ては年々八月十六日法要鉦鼓会を営む

四、寺禄

天正十九年卯年十一月、東照宮当駅へ御出馬。

当寺に御陣営相成、開山より四代戒善法要上人

代に朱印地十五石並に境内不入地八千坪御寄附

被下、代々幕府之御朱印書あり。万延元庚申九

月まで総て十二通拝領。台徳院（二代将軍）大

猷院殿（三代）毎度当寺に被御入城、法問及び

臨時登城被御付、当時「法檀林」なり。

戒善法要上人は寛永四卯年幕府台命により、本山知恩院三十世として転昇す。戒善法要上人は知恩院廿九世　潮誉善照上人の嗣弟なり。潮誉善照上人は正親町帝の御嫡子なり、戒善法要上人（三代）大猷院殿の時臨時登城被御付る時に当時幕府越谷を中心として天領とす。

其の天領地内に八條領の水利用水の便悪く、御用水の実改常に悪く幕府及下の農民共に苦しみ年々其の都度悪し、此の事を臨時登城の節に話題となり、時の往職戒善法要上人は其の意を拝し、天嶽寺御朱印地を上げて新則用水をつくり、八條領（曽根領）の用水の直結を謀り、其の后年々無事に天領の実麻を減し、幕府及王地の農民共に遠びて其の実柄、幕府の大老に通じ、実録を奏し、幕府大老に命じ台命をゆつて一万石のかわりに越ヶ谷一宿一ヶ寺の禄を賜ふ。

其の后　明治維新まで越ヶ谷一町一ヶ寺の伝統を結び来る。

其の間にその用水堀に橋を作り（寺橋と通称）郷土の人々の交通の便を謀りたりと伝ふ。

(イ)　慶応年間に於て誠誉上人の時に弟子寒原清治上

上人と共に上野寛永寺に親しく出入す。しかるとき
彰川の大政奉還の時にあたり、上野に彰義隊の蜂起
り、時の上野の宮に於かれては乱をさけ、起ヶ谷就
に謙善上人寒原清治上人と共に天嶽寺に伏せらる。
明治維新謹まりて東京（江戸）に帰られ、北白川
宮を立てられし由　申さる。

堂　宇

本堂　表面　九間三尺　奥行　八間
書院　表面　二間二尺　奥行　三間
庫裡　七十七坪
鐘楼　二間四方
鐘（梵鐘）は戦時中出征　左記の故もて建立す。
昭和四十年十月　越ヶ谷町、観音横町（音和町）
吉野謙三氏の御寄附にて百八拾貫の梵鐘が滋賀県
黄地鋳造所にて出来上り建立せらる。
楼門　表　三間三尺　奥行　三間
鐘撞堂　一間四尺　奥行　二間四尺
庫裏　二千七百九十六坪
地蔵堂　九尺四尺

不動　八尺　四尺
境外観音堂　四間四方
境内　五百三坪
薬師堂　奥行　二間　境内　三畝十二歩

○
明治廿三年十月二日　火災
明治廿三年　五月　再建
現在　別格　天嶽寺　天嶽寺　三十式
諸道社寺巡工人　正信正
念阿一成和尚代なり

(四)
吾山の墓碑あり
物類称呼等方言の大家なりと
後世　木村図書館長の文参照せられたし

(八)
錦帯橋を造ると言う
戸張儀五郎の墓あり
（墓前の花立の中に亀の刻石あり）

(二)
鷹狩　供養塔あり（本堂右側）
御祈願を敷するものこの一供養碑のみ。

(ホ)
其の他の碑　寿子前婦頌彰碑等。

越谷吾山

本文別紙参照　　越谷市立図書館長書簡

本文二頁上段一行目「考証は他日にゆずる」

資料　考証

一、天徳寺境内墓碑　表面

浩　馨　妙　清　信　女　……俳友浩山の孫か浩の子？

法橋住馨五吾山師竹居士　……

素　成　智　光　信　女　……

背面

浩　延享元子歳九月三日

法　天明七未歳十二月十七日

素　明和五子歳八月二十日

台石　表　神田　側面　後の妻女は神田家の出身と見らるる

「注」　旧習慣妻は生家の墓地に入るものなり

二、吾山の生家　会田家　会田家の祖先　海野家

同　慶長十四酉年十二月十四日歿（一六〇九）

信濃国司　海野庄流の末なり

同　元和八戌年　三月廿日

「注」　これにて信濃の出身たることを知る

三、法　又　既　霊名簿によれば　明らかである

四、熊谷図書館資料　写真　教師より求れば　(1)諸国物類称呼全五冊　方言

吾山の著書　　江都　越谷吾山秀真編輯

吾山年表　四六・五月資料より。

天保二年吾山越谷に生る（一七三一）

10　20才　30　40才　33

一七三六　改元

一七四一　中司乙田大門家入　佐久間柳居に師事入　柳居五三才（伊勢参）

一七四四　辛酉　寛保と改元

一七四八　戊子　延享元年九月三日妻死去　浩馨女清信女

一七四八　戊寅　寛延と改元　柳居（六五才）歿く。

写真の二　耽奇慢録「五二九」曰く

俳諧師田女黒木売　田黄　　著者　源林　氏

文曰　田女ハ江戸側の判者　一漁が妻也　明和安永の間江戸に婦人の判者三人ありけり　いわゆる田女。犬飼（判者良竹が妻なり、二代目園女（判者二代目の規亭が妻）是也

この田黄は明和中の産也　させるものならねども死人の遺愛たるをこのたび奥便が写し出すによりて　暗記のまゝをかいつけつ」　ある通り年表と照合して暗記の誤りを指摘出来る。

1. 吾山の死亡年月に「天明八年十二月十七日は天明七年の誤り」位牌照合

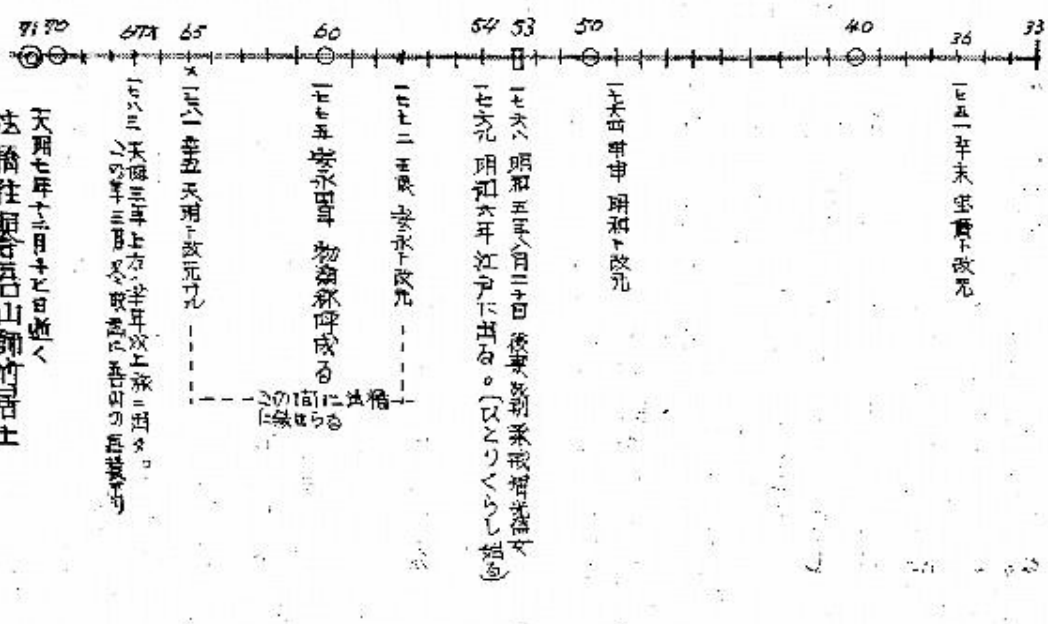
2. 天明三年に六七才の吾山が七十余才となっている。

然し師弟関係の変遷が混淆するに便である。余文脈を通せば意義深いものであろう。ここでは写真に見る限度で紹介しておこう。

俳諧師冬映面、法橋吾山撰「日出大里」天明三年春のもの

冬映が初五色黒の和歌の弟子也　後に法流に従ふて判者になりけるにや　法流が江戸砂子中の地図は冬映が著述のとき之の事なり（二代目冬映と云う判者あり、これは初代也、

注すべからず）と注を施している。



法福吾山ハ越谷氏号師竹庵　武蔵の人也俳諧を柳居に学び、後に沾山に従ふて判者になれり、かくて沾山歿後に至って独立の判者たり、その著す所物類称呼・俳諧習俗・宋旅俳諧本草・俳刻等あり、この画賛は天明三年の春正月　冬映吾山各七十余歳の試筆也

（吾山ハ天明八年十二月十七日に歿し、冬映が歿せし歳はわからず）又吉も又させるものならねど伯兄の愛なるをけふの佳節の祝物までに出しつ　　著作堂

吾山の賛　　下冬映の画

打出すヨか（鏡）　古司年　こがねか　初日影　　大黒の打出の小槌

本文注し　伊勢風の佐久間柳居に俳諧を学ぶ

伊勢風を去めたのは岩田涼菟の弟子の中川乙由でその弟子が柳居で吾山はその弟子である。

注(一)

岩田涼菟——中川乙由——佐久間柳居——越谷吾山

麦舎林と号す

（注四）判刻家　俳句

沾涼　　沾山

資料写真　　画冬映（初代）　　冬映　　天明三年正月　賛吾山

注三　雪中庵　三世大島蓼太

高桑蘭更（一世雪中庵）——桜井吏登（二世雪中庵）——大島蓼太（三世雪中庵）

(1)　高桑蘭更　江戸中期の俳人（一七二六—一七九八）天明六俳人の一人。蕉風の復興に努め芭蕉の遺稿を復刻した功績は大きい。天明の俳諧中興に力があった　句集に半化房発句集、俳論花の故事等がある。

(2)　桜井吏登　桜井梅室　江戸後期の俳人　京坂で両吟で知られた一家高桑蘭更に師事す。特に梅室は天保俳壇の中心で梅室家集あり

(3)　大島蓼太　本名平八　江戸後期の俳人（一七二八—一七九七）吏登の門下　蕉風の復活に力め平明な俳風。蓼太句集・筑波紀行などがある

注(一)の背景　上記参照

麦舎林と号した中川乙由は岩田涼菟に師事し蓬莱嘉右衛門　江戸中期の人。後年美濃風の各務支考と共に　支考風と呼ばれ、天保の俗調の先駆となったものと称されたがこの乙由の弟子が柳居　その弟子が吾山と関係ある。

注五　青年時代から江戸へ屢々出府した云々：

吾山二四才元文四年（一七三九）　伊勢風の中刊乙由死去した歳。その弟子佐久間柳居に入門した位牌に見る右側　沾蓉妙清信女　延享元年九月三日の日付（甲子一七四四）は吾山二九才に当り江戸入りして五年目　沾は刻系譜から沾源沾山の関係有か。

仮りに沾の一家に縁あったとすれば江戸出府は徘諧以外にも嘱望されたと見られる。柳居名は長刑別号長水（後って長谷川と称したと伝う）江戸中期の人（一六八七～一七四八）　俳句と併行して判刻（出版）のことをも学ぶ　沾源系は判刻一家（版木の刻）

注六

明和六年（一七六九）吾山五三才　江戸へ移り天明和五年八月二十日　後ち添えの死別にあい長に服せしが翌六年感ずる処あり転居し俳道一筋に進を図く　素戒智光信女（明和五子歳八月廿日　ぜ二七六八）五四才独りくらしの気楽さと友夢まで江戸へ：そして安永年間法橋に叙せらる（注参照下記）又六十才の稀頌称呼の版刻　其の他の著作等見るべきもの多く残す。恐らく二代目冬歌「著作堂」か。

注

法橋……僧綱（そう）の官位

大僧正　大納言相当官
僧　正　中納言相当官
権僧正　参議　相当官
大僧都（ダイソウズ）
僧　都　僧正に次ぐ位
小僧都　僧正僧都を監督する官位

○法眼　法印に次ぐ位、法眼法橋があるが、
○法橋　一般庶民にも次の処に在る者に与えられている。

イ　絵師
ロ　画工　狩野法眼元信の如し
ハ　連歌師　吾山はこの系統で与えられたものであろう

○　律　法眼、法橋に次ぐ僧位

補考

イ　僧侶を任官任命するところ　塔頭（タッチュウ）あり、一山を預る学頭の制等が見える（後記）

ロ　天満寺正僧正は中納言相当官と見られる。

注七　天明三年上方への旅……五ヵ

写真の画賛　日出大黒　冬瓜の画

この年を「ヵ」で写す

イ　天明三年とは　大饑饉の二年目同二年から始った冷害は天明八年までつゞく全国的凶作の当り年で、吾山の晩年は社会不安の頂上だった。従ってこの画賛に見るもの淋諧人としての頽望がかかっている。打出のこづゞから、玉か黄金かの願望、不凶の後の初春へ

ロ、都への旅も只の旅ではあるまい。僧籍者の憂くが路上に飢えになく老若（少年少女）への救恤奉社託鉢の憂い頃とて余生への生甲斐も合む

か。妻と死別して十四年目六十七才を迎えた

ハ、柳居師と死別して三十有五年、伊勢風は桜井藩雪時代に移り一度は本藩の空気を吸って見たかったか。

ホ　長い旅の後　凶作続きの中に病弱と老衰とが危し　天明七年の師走十七日に七十一才を一期とし黄泉の旅へ赴く　越谷吾山（江戸にて）

吾山資料

其一　天獄寺境内　墓碑

其二　位牌

其三　法久院霊名簿

其四　写真　熊谷図書館提供

イ　物類称呼

ロ　耽奇漫録

ハ、日出大黒　冬瓜画と吾山賛

其五　画賛資料

イ　麦舎祢　伊勢風系譜

ロ　別者系　沾山

ハ　雪中庵　系統

其六　関係資料

イ　僧綱の官位

ロ　法橋　法眼　法印

ハ　僧正　僧都

其七　吾山年表

イ　注の各項

注の照合

木村館長述の頁と行

原文　二頁上段一行目「考証は他日にゆずる」

注一　一頁ノ九行上段二字目・伊勢風の佐久間柳居

注二　一頁上段　十行二字目　沾山

注三　一頁上段　十三行目九字の後大島蓼太…雪中庵一舎二舎三舎とは

注四　法橋……一頁上段最後の行

注五　一頁下段ノ四行目下の方に「江戸へ屢々出府し」

注六　一頁下段六行目　明和六年一七六九年五十三才頃江戸へ移住し・多くの交友云々

注七　二頁下段　九行目

明和三年は誤記　天明三年と改む

※　天明三年（一七八三）の七方への半年以上の長旅……云々

※同じ位牌　天徳寺神田家墓地　(1)
戒名は下　旧法久院の墨名簿　(2)
記の通り　新町会田家過去帳　(3)

注八　二頁上段　十行目から十四行目迄の関係資料　吾山の背景の俳諧人

イ　俳諧系譜　柳居　伊勢風　蕉風馬場

判刻系譜　沾山・冬映　沾涼　涼菟　吾山の師　南象門　柳居師（一部）

ロ　同時代の俳諧人と潮流

雪中庵　A　高桑蘭更（一七二六～一七九八）
桜井夷白　伊勢風宗匠で有名
大島蓼太（一七一八～一七八九）

伊勢風　B　岩田涼菟
中川乙由
佐久間柳居（一六八七～一七四八）
麦舎林一六七五～一七三九

美濃風　各務支考

芭蕉風　尚白　中心勢力数頃る多し。

既奇慢録の記載差（暗記故）

イ　天明三年に七十余才となっている

ロ　法橋吾山の没年　天明八年十二月十七日とあるが墓碑、位牌には、天明七年十二月十七日とある。

メモ　月　日　曜　場所